

The reason why someone who became a nurse after experiencing working as a nurse aimed to become a nurse : from the story of the parties

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊東, 美智子, ITOH, Michiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20608/00001041

報告

社会人看護師が看護師を目指すに至った経緯

—当事者たちの語りから—

伊東 美智子¹⁾

The reason why someone who became a nurse after
experiencing working as a nurse aimed to become a nurse
- from the story of the parties -

Michiko ITOH¹⁾

要旨

【緒言】昨今、社会人経験後に看護師になる人（社会人看護師）が増加している。高校卒業後、直ぐに看護師養成機関に入り看護師になった人とは異なる背景を持った看護師同士が共に働きやすくなるために、5名の協力者に転職の契機と経緯を聴き取った。【方法】質的研究法、ライフストーリー・インタビュー法【結果】語りの内容は「前職に就いていた理由」「離婚や別居と自力での子育て」「このままでいいのかわ」「仕事や家族に起きた突然の出来事」「看護師になりたい」「家族からの援助」に6分割できた。さらに、様々な契機が関連しあって転職に向かう経緯を辿っていた。【考察】現代において転職は、既に当たり前の出来事になりつつあり、看護の世界も同様である。彼らとの協働を進めるためには、受け入れ側が先ず、社会人看護師のこれまでの豊かで深い経験を知り、個々の特性を理解した上で職場適応への支援を考えることが重要である。

キーワード：社会人経験, 看護師, 転職, 経緯, 語り

Abstract

【Introduction】Recently, there is an increasing number of nurses (nursing professionals) who become nurses after experiences of working with people. To build a good relationship among nurses with different experiences, understanding the circumstances of career changes seems to be important. For this purpose, I interviewed five nurses who became nurses after experiencing doing other works. 【Method】Qualitative research method, using life story interview. 【Results】The

1) 保健科学部看護学科

content of the stories could be divided into six categories. “The reason for choosing the previous job,” “Divorce/separation and parenting without financial support,” “Is it OK to be like this?” “Sudden events that occurred in family or workspace,” “I want to be a nurse,” and “Assistance from family.” 【Discussion】 Job change is already becoming an ordinary event, and this is occurring in the nursing profession as well. It is important for the educators and recruiters to know their rich and deep experiences of the past, understand individual the circumstances of career changes , and consider support for nurses to adapt to the workplace.

Key words: work experience, nurse, change jobs, circumstances, narrative

はじめに

近年、社会人経験後に看護師を目指し、看護師養成機関に入学してくる者（以下、社会人学生）の数は増加傾向にある。2012年度の日本看護学校協議会の調査によると、看護専門学校での社会人学生数は23.7%¹⁾と、全体の四分の一近くに及んでいる。社会人学生増加の現象は、新人看護師の中に社会人経験者が増えることを意味する。先行研究では、「看護の世界で生きてきた者と違う価値観のようなもので固まっている人もいる」²⁾など、教育上の課題が取り上げられている³⁾。さらに、新卒看護師の1年未満の離職率に関する報告では、社会人未経験者が12.7%であるのに対し、社会人経験者が19.0%と高く⁴⁾、職場定着率は必ずしもよくない。

看護師になるためには、看護師養成機関で一定期間（専門学校であれば3年）をかけて学修するプロセスを踏むことが前提となる。そして、これには学費が発生するなど、経済的負担が生じる。これまで給与を得ていた社会人経験者にとっては、学修期間は収入が途絶えることにもなり、多大な負担となる。そこまでして看護師になろうとする社会人経験者の転職の経緯とは、一体どういったものであろうか。社会人学生や社会人看護師を受け入れる側は、入学以降、あるいは入職してからの姿しか目にしていないが、この点について十分に理解しているのだろうか。そこで本研究では、転職後に看護職に就

いている者の語りから、前職から離れて看護師を目指すに至った経緯を明らかにする。

研究目的

社会人看護師たちが看護師を目指すに至った経緯を、当事者たちの語りによって明らかにする。

用語の定義

社会人経験

社会に出て働いている個人であり民間企業等におけるパート・アルバイトを含む、看護職以外の就業経験。

社会人学生

社会人経験を経た後に看護師を目指す看護学生。

社会人看護師

社会人学生を経て看護師として勤務する看護師。

研究方法

- 1) 研究デザイン：質的研究・ライフストーリー・インタビュー法。本研究では、転職という非常に個人的な出来事を扱うにあたり、個人の主観的な観点から経験の意味づけや人生の様相をとらえる⁵⁾ことが重要であると考えたため、ライフストーリー・インタビュー法を取り入れた。

- 2) 研究協力者へのアクセス：この度は、ネットワークサンプリングを用いた。看護学校での勤務経験のある知人の紹介や、研究者自身の知り合いを通して研究協力への打診を医療機関の看護部長に行った。その結果、承諾を得られた機関より本研究の協力者として条件に該当する人を推薦してもらった。その後、研究者が協力者と個別に会い、研究説明に進んだ。
- 3) データ収集方法：データ収集は半構造化インタビューを行った。テーマは「看護師を目指した理由」である。インタビューの場所は、研究参加者が勤務する医療機関の面談室など、静かでプライバシーが守られる場所を借用した。
- 4) データ収集期間：2018年7月中旬～2018年9月中旬にデータ収集を行った。

倫理的配慮

神戸常盤大学研究倫理委員会に諮り、了承が得られてから研究に取り組んだ（神常大研倫第18-06号）。事前に研究協力の承諾を得られた所属医療期間の看護部長を通し、協力者向けの研究説明書類を届けた上で、協力者本人から研究者に電子メールで連絡をもらい、インタビュー日時や場所の調整を行った。インタビュー初日の導入部分では、調査の趣旨と協力は自由意思であり中断の自由も確保されていること、回答したくないインタビューには返答しなくても良いこと、調査への協力をしなくても不利益を被らないこと、インタビュー内容は本研究

の目的以外には使用しないこと、同意書を含む紙媒体や収集したデータは鍵付きの棚にて厳重に保管すること、研究終了後に本調査で得たデータは破棄し個人が特定されないようにすること等を、文書と口頭で説明して同意を得た。

結果

同意を得られた研究協力者5名に60～90分のインタビューを実施した。

1. 研究協力者の属性

協力者は社会人経験後に看護師になった修業3年未満の現役看護師5名である。年齢、性別、職歴は以下に示す（表1）。

2. 分析結果

語りの内容から意味内容の類似性と相違性を比較し、カテゴライズした。その結果、社会人看護師が看護職を目指すに至った経緯は6つに分類された（表2）。

以下、サブカテゴリーを〈〉、コードを「」で表しながら、社会人看護師が看護職を目指すに至った経緯について述べていく。

1) 〈前職に就いていた理由〉

元々から、介護福祉士や臨床検査技師等の対人援助職に就いていた人もいれば、全く異なる分野から看護職に近づいていった人もいた。

表1 協力者の属性

協力者名	性別	進学時の年代	職歴
A	女性	30歳後半	音楽講師（15年）→医療事務→ケアワーカー
B	女性	30歳後半	（第一子の子育ては落ち着いてから）調理師（パート）
C	女性	30歳後半	臨床検査技師（10年）
D	男性	30歳前半	販売・接客→介護福祉士（5年）
E	男性	20歳後半	営業（2ヶ月）→生産業→フリーター（1～1.5年）→社会福祉士

表2 看護師を目指した理由及び周囲からの影響

サブカテゴリー	コード	発言者
前職に就いていた理由	医療事務の資格をとってクリニックに勤めだした	A氏
	その後、ケアワーカーの仕事に就いた	A氏
	元々、医療の仕事をしたと思っていた	C氏
	高校の進路選択のときに看護師や臨床検査技師かで迷ったが自分は検査技師を選んだ	C氏
	資格が欲しいなって思った時に、介護士の資格をとった	D氏
離婚や別居と自力での子育て	大学が福祉系を卒業していたので福祉士の資格はもっていた	E氏
	離婚して子どもを(一人で)育てる	A氏
	子どもの二人目が生まれた後に別居をして子どもとだけ、こっち(地元)に帰って来た	C氏
	こっち(地元)で仕事がない お金は自分が稼がなアカンっていうのがあった。	C氏 A,C氏
このままでいいのか	丁度、このまま介護士を続けていていいんかなって思ってた	D氏
	介護の先輩が「看護師になる」って言って、先に看護学校に進学した	D氏
	30歳の介護士や理学療法士は転職が難しい現状	E氏
仕事や家族に起きた突然の出来事	クリニックにいた時に来ていた時の患者さんが、(ワーカーとして勤務していた病院に)意識もあるのかどうか分からない状態で入院してきた	A氏
	ある時に突然、「あなたにこんなことをしてもらえんと思ってなかったわ」って言われて	A氏
	2人目の子どもが胎盤早期剥離を起こして(亡くなっている)。	B氏
	今から思えば2人目の死産経験も看護師を目指すきっかけになっていたかも知れない	B氏
	父が倒れて利き手の機能を失った	E氏
	それまで自分は生活指導員として援助していたが、自分の家族には手が出せなかった	E氏
看護師になりたい	「あ、私、看護師になりたいな」と思った	A氏
	当時の看護師仲間の存在もあって	A氏
	月一度の子ども外来受診で「○○さん」とかって呼ばれ、「ああ、こんな仕事もいいな」と	B氏
	保育園のママ友に看護学生がいて、「あなたもどうお？」と言われたりしていた	B氏
	父親に「あの時に看護師になつたらよかったんちゃうか？」って、言われた	C氏
家族からの援助	ちゃんと勉強したいと思って、看護師を目指すようになった	E氏
	(看護学校に)進むにあたって、家族にも相談して主人も頑張つたらって言ってくれた	B氏
	言った以上、頑張らないいけないと思った	B氏
	父に「近くに看護学校があるから看護師になったら、何処でも働けるんちゃうか？」って	C氏
	で、奥さんに挑戦したいという彼女もさせてくれた	D氏
	お義父さんにも援助してもらったり 身内を通して、自分に知識や技術が無いことに気付かされた。	D氏 E氏

前者の事例として、臨床検査技師として働いていたB氏は「元々、医療の仕事をしたと思っていた」が、「高校の進路選択のときに看護師や臨床検査技師かで迷ったが自分は検査技師を選んだ」。E氏は、「大学が福祉系を卒業していたので介護の資格はもっていた」。

後者の、元は対人援助職ではなかったが介護職に就いた人の経緯として、元音楽講師であったA氏は「事務的なことは全く出来なかったので、医療事務の資格をとってクリニックに勤めだした」後で、「ケアワーカーの仕事に就いた」と語っている。D氏は「レンタルビデオ屋で勤務した」後、「資格が欲しいなって思った時に、介護士の資格をとった」という。

2) 〈離婚や別居と自力での子育て〉

離婚や別居を契機として、看護師になった人が2人いた。両人共が「お金は自分が稼がなアカン」という、「一人で子どもを育てないといけない」理由から転職を決意していた。元音楽講師のA氏は、前職では勤務時間が子育てや家事に支障を及ぼすことから、まずは「医療事務をして外来クラーク」に就き、その後さらに病院の「ケアワーカーをして」、そこから最終的に看護師に繋がっている。一方のC氏は、「別居をして子どもとだけ、こっち(地元)に帰って来た」結果、地元では臨床検査技師の求人がなかった。そこで、転職して看護師を目指すことになった。

3) 〈このままでいいのか〉

D氏は前職を5年経験した頃に、「このまま介護士を続けていいんかなって思ってた」と、今後に向けての漠然とした不安のようなものを抱えた。そんな時、同じ施設で勤務していた「介護の先輩が『看護師になる』」と聞き、実際に進学していった姿を観たことがかなり影響した」と語っている。

E氏は幾つかの職を転々とした後で、「30歳の介護士や理学療法士は転職が難しい」と、正職員採用の厳しい現実を肌で感じる日々を送る一方、家族に突然の不幸が起きたことから転職を決意している。詳細は後に述べる。

4) 〈仕事や家族に起きた突然の出来事〉

先ずA氏であるが、彼女がクリニックで勤務していた時に通院していた外来患者が、次にケアワーカーとして勤務していた別の病院に偶然、「全然もう意識もあるのかどうか分からない状態で入院してきた」という。その後、少しずつ回復したその患者から、「ある時に突然、『あんたにこんなことをしてもらえると思ってなかったわ』って言われて感動した」、という。

B氏は15年前、「2人目の子どもが早期胎盤早期剥離を起こして（亡くなる）」という経験を持っており、今から思えばこの「死産経験も看護師を目指すきっかけになっているかも知れない」と、インタビューの後に語っている。

E氏は、「父が倒れて利き手の機能を失った」だけでも衝撃であるのに、息子として父の身の回りを整えようとした時に、「それまで自分は生活指導員として援助していたが、自分の家族には手が出せなかった」体験から「本格的に学びたいと思った」と言う。

5) 〈看護師になりたい〉

これはA氏が3)で述べたように、思いがけない形での患者との再会とその患者からの感謝の言葉から「あ、私、看護師になりたいな」と瞬間的に

思ったという。と共に、「当時の看護師仲間の存在」も目標に近づける力になっていた。

B氏は「月一回の子ども外来の受診で『〇〇さん』とかって呼ばれて、『あぁ、こんな仕事もいいな』な」と感じたことから、看護師を意識しだした。それと同じ頃に、「保育園のママ友に看護学生がいて、『あなたもどうお?』と言われたりしていた」ことも手伝って、進学を決意していた。

C氏は地元に戻っても前職の求人が無くて途方に暮れていたところ、「父親に『あの時に看護師になっとったらよかったんちゃうか?』」と言われ、再び看護師を意識し始めた。

E氏は、倒れた父親に対して専門家として援助が出来なかった体験から、「ちゃんと勉強したいと思って、看護師を目指すようになった」と語っていた。

6) 〈家族からの援助〉

続いて、看護師を目指す際の家族の存在や影響についても語られていた。B氏は、「(看護学校に)進むにあたって家族にも相談して『主人も頑張ったら』って言ってくれた」とし、「言った以上、頑張らないいけないと思った」と、述べている。

C氏は再就職について悩んでいる様子を見かねた「父に、『近くに看護学校があるから看護師になったら、何処でも働けるんちゃうか?』って言われ、具体的な方法も提示された上で転職を勧められている。

D氏は家庭の大黒柱であり、既に2人の子どももいた。その状況で仕事を辞めて看護学校へ入学することを「奥さんに挑戦したい」と、彼女もさせてくれた」とし、「お義父さんにも援助してもらったり」、経済的にも支えられながら学んだ。

E氏は、倒れた父親の療養生活において生活援助ができなかったことで「身内を通して、自分に知識や技術が無いことに気付かされた」と、語っていた。

考察

リクルートワークス研究所が手がけた「ワーキングパーソン調査 2014」における「Part IV 転職行動実態」によると、正社員・正職員では45.8%、18～59歳のワーキングパーソン全体では56.8%に転職経験があると報告している⁶⁾。さらに、どの年代で転職が増えているのかを観ると、2014年では60歳代について、35～39歳の転職率が54.7%⁷⁾と最も高く、2017年の同年代の転職率は、58.4%⁸⁾とさらに上昇し、今回の協力者5名中3名がこの年代と重なり、同様の傾向がみられた。これらより、社会人学生や社会人看護師の増加は巷からすれば特別な現象ではないことがわかる。

では次に、なぜこの世代に転職が多いのかについて考える。まずは、離婚や別居といった、生活変化が上げられる。厚生労働省の「離婚の年次推移」⁹⁾統計結果を観ると、妻の年代は2000年から1位が30歳前半、2位が30歳後半と、今回の協力者2名の背景とも合致する。離婚や別居がきっかけで生活環境が一変し、再就職先が無かったり、独りでの子育てと家事の両立を果たしたりするために転職が迫られた実態が浮き彫りとなった。

続いて、発達課題の特徴と協力者の語りを照らし合わせる。発達心理学者のレビンソン (Levinson, D. J.)¹⁰⁾によると、「30歳の過渡期 (28～33歳頃)」になると、人は「生活にそれまでのような暫定的・模索的な面が少なくなり、いま生活を見直さなければ手遅れになってしまうという焦燥感が生まれる。多くの人にとって、この時期はストレスに満ちた変化のときである。それまでに満足のいく生活を築くことができている場合でも、この時期は生活を修正・調整して、自分の人生をより豊かにするために使われる」という。これについてはD氏やE氏の、「このままでいいのか」と現状吟味した結果として転職に繋がっていた姿が相当するであろう。

さらに「一家を構える時期 (成人期での第二の生活構造) (33～40歳頃) の「特にこの後半は、成

年期の最盛期に至って一本立ちする時期を迎え、自分を打ち出していく野心的な側面が重要となるため、周囲や年長の人たちと調和しようとする志向との間で葛藤が起こりやすい時期にもなる」と述べている。これについては、C氏のからのアドバイスによって看護師養成機関への進学を決断した語りが、これに該当するであろう。

次に各協力者に起きた幾つかの出来事が一つの点から始まり、やがて関連し影響しあって看護職に方向付けられていった流れをみてゆく。このことは、「ストレスに満ちた変化」¹¹⁾に巻き込まれながら、単なるストレスに終わらせず、転職という次へのステップに発展させていった過程でもある。

A氏の場合、音楽講師を辞めて医療従事者に転向する必要性に迫られたきっかけは、離婚であった。そこから医療事務の資格をとり、さらにケアワーカーとして働く先で再会した患者からの思いがけない一言が、看護師への思いを強くする方向に働いた。

A氏と同様に別居が転職のきっかけとなったC氏が、最終的に看護師に就いた経緯は前職での地元医療機関における再就職が叶わなかったことにあった。

調理師に就いていたB氏は、子どもの受診と、ママ友からの誘いの言葉がきっかけとなり、看護師をめざすことになった。さらにさかのぼれば、第二子の死産体験も少なからず影響しているかも知れないとのことであった。

販売・接客業から介護福祉士となり、そこから看護師へと転職したD氏の場合は、身近な先輩が看護師を目指して進学したことから、同じ看護学校に入学を果たしている。

もう一人の介護士E氏は、「今まで僕は3つ、仕事を辞めています」「リーマンショックが理由で1年で辞めた」時もあり、「もうこれ以上、惨めな思いはしたくない。ろくな仕事も無かったり、仕事にも定着できなかつたりというのが凄く辛かった」と、転職続きでなかなか定職に就けなかった苦し

さを語っている。加えて倒れた父を介護出来なかった体験が、看護師への転職へと結果的にE氏を促していた。

このように社会人看護師が、前職から看護師に転職してくるには一人ひとりに経緯があることが分かった。もちろん、高校卒業後直ぐに看護師養成機関で学び、入職してくる看護師にも個々の事情や背景があるため、社会人看護師だけが特別ではない。しかし、着実に増加の兆しにある社会人学生や社会人看護師との学びや働きについて、今の看護教育や臨床看護の世界は未だ模索の中にある。ここでようやく、社会人学生や社会人看護師に関する先行研究も積み上げられつつある。一つは冒頭でも紹介したように、進学までに形成された価値観との折り合いの付け方への課題が社会人学生時代から既に指摘されているが、社会人看護師となった1年以内に退職した人を対象にした金子の研究¹²⁾では、「社会人経験との比較による違和感」に始まり、最終的に「自己像の崩壊」をきたして早期退職に至っていた。これは、最初から看護職に就いていた人と、異業種での勤労経験を経て看護職に就いた人の双方の違いを指摘するだけに留まっていることが原因ではないだろうか。この現状を打破するには、互いの違いを受け入れ、歩み寄り、活かし合う努力を重ねるしかない。その第一歩として、総数として圧倒的優位に立つ受け入れ側が、社会人看護師のわざわざ前職から離れて現職を目指すに至った契機や経緯を知ること、彼らの豊かで深い経験を理解することが重要だと考える。それは、常々我々が「看護においてその対象者である患者を理解することは、看護の目的達成のための第一要件」¹³⁾と謳ってきたことと通じる。その上で、個々の経験を踏まえた職場適応への具体的な支援を当事者と共に考えることが求められている。

なお、今回の語りには無かったが、他に看護師への転職を積極的に向かわせる社会的制度や状況として、母子家庭の片親に至急される高等職業訓練促進給付金等事業¹⁴⁾の活用や、職業別新規求人倍率

において看護職は常に3倍を維持している¹⁵⁾状況があることも見逃せない事実である。

最後に今後への課題として、本結果は5名の協力者の体験によるものであり、普遍化するには少ないと考える。今後はさらに対象者を増やし、看護師に就いた後に退職に至った人の声にも耳を傾け、量的調査で検証することも必要だと考える。

結論

- 1) 本研究では、社会人看護師たちが看護師を目指すに至った経緯を、当事者たちの語りによって明らかにすることに取り組んだ。その結果として、まずは〈前職に就いていた理由〉があり、そこから〈離婚や別居と自力での子育て〉が迫られたり、前職に対して〈このままでいいのか〉と現状吟味したり、あるいは〈仕事や家族に起きた突然の出来事〉を通して、これまでの生き方の見直しを迫られていた。その後もさまざまな経緯があって〈看護師になりたい〉と思い、実際に看護師を目指すに至ったことが分かった。
- 2) しかし、いざ転職への決断を下すに際し、様々な形で影響していた。このように、社会人看護師は豊かで深い経験を持って転職してきていることを踏まえて、スムーズな職場適応への支援を考える必要がある。

利益相反状態に関して

本研究において、表記すべき利益相反状態はない。

謝辞

多忙な中、快く研究に協力してくださり、貴重な語りを聴かせて下さった社会人看護師の皆様にご心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省. “看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針” 2015年03月. 厚生労働省.
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000079680.pdf>,
(参照 2019-01-09).
- 2) 荒川真知子, 興梠清美. 看護学校が今すべきこと①受け継いできたものを未来につなげるために. 看護展望. 2014, Vol.39, no.10, p.60.
- 3) 高野真由美. 社会人経験を持つ看護学生の理解と支援—看護への志望動機と就学上感じる困難について文献からの検討—. 川崎市立看護短期大学紀要. 2017, 22巻, p.37-45.
- 4) 寺岡葉子, 森ゆかり, 大屋紀子, 佐藤恵子, 大西君枝, 長尾真由美. 社会人経験をもつ新卒看護師の職場適応を促す関わり. 淀川キリスト教病院学術雑誌. 2008, 25巻, p.48-52.
- 5) 徳田治子. “ライフストーリー・インタビュー”. ワードマップ 質的心理学. 無藤隆, やまだようこ, 南博文, 麻生武, サトウタツヤ編者. 新曜社, 2004, p.148.
- 6) リクルートワークス研究所. “Part IV 転職行動実態”. ワーキングパーソン調査 リクルートワークス研究所, 2014, p.136.
http://www.works-i.com/pdf/150325_WP2014_4.pdf, (参照 2019-01-09).
- 7) 厚生労働省ホームページ. “結果の概要 事業所調査 1. 転職者の状況”. 平成27年転職者実態調査の概況. 厚生労働省. p.5. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/6-18c-h27-1-01.pdf>, (参照 2019-01-09).
- 8) 6) p.136. http://www.works-i.com/pdf/150325_WP2014_4.pdf, (参照 2019-01-09).
- 9) 厚生労働省ホームページ. “平成21年度「離婚に関する統計の概況」—離婚の年次推移”. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/rikon10/01.html>, 2019-01-09.
- 10) 大矢康士. “9章 成人期—社会人として”. ライフサイクルの臨床心理学. 馬場禮子, 永井徹 編著. 培風館, 2008, p.142-143.
- 11) 10)
- 12) 金子多喜子, 荒添美紀, 天野雅美, 齊藤茂子. 社会人経験のある新卒看護師の早期退職までの心理的過程. 看護教育研究学会誌. 2016, 第8巻1号, p.3-13.
- 13) 古地順子. 患者と看護師との理解の過程—意思表示が困難な患者の場合—. 日本赤十字看護学会誌. 2003, Vol.3, No.1, p.60.
- 14) 厚生労働省ホームページ. “母子家庭自立支援給付金及び父子家庭自立支援給付金事業の実施について”. <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000062986.html>, (参照 2019-01-09).
- 15) 厚生労働省ホームページ. “労働市場分析レポート第61号 求人倍率の高い職業の動向”. <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11600000-Shokugyouanteikyoku/0000110648.pdf>, (参照 2019-01-09).